

木々の葉影で顔つきはよく見えないが、えらそうな聞き方ではなく、ゆったりと問いかけてきた。

だが仙吉は返事をせずに、武士の言葉の意味をさぐった。——おいらだって、信州山人のはしくれだ。もし、こいつらが奥山廻りなら、小屋のありかは口がさけても言うもんか。別の道へ迷い込ませてやる。

武士が言葉をつなぐ。

「安心せい。拙者は加賀藩士ではあるが、奥山廻りの者ではない」

仙吉の不安は完全に見ぬかれていた。

加賀藩奥山廻りの役人たちは、年に数回、信州松本藩との国境を見まわりに来る。信州の山人たちが信州領内で伐採しているのに、「加賀藩の木々を盗伐している」と決めつけ、山人を捕らえたり、寝泊まりしている小屋を焼き払ったりするのだ。

武士が、少しくだけた調子で言う。

「いささか信州松本に用があり、針ノ木峠を越えるつもりであったが、初めての山越えゆえ、足にマメをこしらえて難儀しておるところじゃ」

奥山廻りの役人は、四十人もの大人数で来るといふ。目の前にいるのは、わずか三人だから、その役人たちではないようだ。

だが、油断は出来ない。

なおもだまっている仙吉に、武士がさらに言葉をかけた。

「道案内の者が言うには、今から針ノ木峠を越えれば夜中になるそうじゃ。それに、風が雨をふくんでいるゆえ、今夜ひと晩、小屋に泊めてもらえればありがたい」

たしかに、雨のふりそうな気配はあるし、この武士の言葉に、うそは感じられない。本当に困っているようだ。

だが今、仙吉のお父ら大人たちは、伐採したネズコを挽いた板を里へおろしに帰っている。明日にならないと山へは戻ってこない。

そのあいだ、仙吉は、たったひとりで小屋と仕事場の留守番をしているのだ。

仙吉が十三歳になったので、初めてひとりで山に置き去りにされた。「一人前の山人になるための肝だめし」だそう。もうイワナ釣りは大人にだって負けないが、獺や木挽きなどは、一人前にはほど遠い。

「ひと晩、お山とじっくり語りあえば、大きくなれるだよ」と、おやじたちは、とっとと山をおりてしまった。

仙吉は迷った。

——この加賀者らをどうする？

小屋へ案内すると言って別の枝道へ誘い込み、自分だけ姿をくらますか……。

だが、山人のあいだでは、「山で困っている者がいれば、